

## 藤並城跡の発掘調査速報

藤並城跡は、下津野に所在する鎌倉時代から室町時代にかけての城館跡で、その範囲は東西75m、南北90mを有しています。築城主については明らかではありませんが、鎌倉時代には藤並荘の地頭を務めた藤並氏が館を構えたと推測されます。また、『紀伊続風土記』には「堅田次郎八屋敷跡」と記されており、室町時代には堅田氏が城主であった可能性が考えられています。

藤並城跡の現状は、多くが畑となっていますが、城館の周囲には土塁が巡り、北・東・西側には堀が今も残されています。藤並城跡のように平地に築かれた城館跡の大半は、後世に土塁が削られ、堀が埋め立てられることが多い、藤並城跡のように土塁と堀の双方が遺存しているのは大変珍しいことです。藤並城跡は、和歌山県内では最も残りの良い平地の城館跡として貴重な史跡です。教育委員会では、7月から藤並城跡の内容を確認するための、初めてとなる発掘調査を実施してきました。調査は北側の堀と南側の堀・土塁を対象に実施しています。今回は北側の堀について調査成果をお知らせします。

調査の結果、北側の堀は室町時代に改修されていることが判明しました。堀の底は平らな形状をなす箱堀と呼ばれるものです。現状の堀から1.3m下で堀底が確認され、幅は約3.2mあります。堀は急傾斜に掘られており、土塁の上までは約4mあることから、防御性の高いものとなっています。堀の内部からは陶磁器や木製品などと共に、焼けた瓦が出土したことが注目されます。瓦は破片となっており、割れた断面部分も熱によって赤く変色していることから、失火によるものではなく、瓦が割られた後に火を受けているものと考えられます。このことから、藤並城跡にはかつて瓦葺きの施設があり、戦争によってこれらの施設が破壊されている可能性も考えられます。



北側の堀（上：調査前 下調査後）